曇天 ― どんてん、くもり空。

全編統一された冷たい曇天色の空気感。笑いの中に物悲しさが漂い、観るほどに味が染み出る。
『鬼畜大宴会』監督/熊切和嘉

どんてん生活

山下敦弘 監督作品

[1999年／16mm／カラー／90min]

Cast
山本浩司　宇田鉄平

STAFF
山下敦弘（監督）
真夜中の子供シアター（制作）近藤龍人（撮影）
向井康介（照明）赤犬（音楽）前田隼人（音響）鬼プロ（特別協力）

この映画は二人の奇妙な青年のけっして晴れてはいない曇天(ドンテン)の日常がバディ・コメディ風あるいはニューシネマ風に描かれている。フィックス画面の自然な長廻しとも感じさせないスタイルと、あからさまにならない会話の間(ま)は何が起こるともなく可笑しさが画面に充満し、十分に喜劇の才能を感じさせる。
監督の山下をはじめ『鬼畜大宴会』のスタッフが新たに結集したインディペンデント映画期待の最新作である。

NN

(エヌ・エヌ・891102)

その瞬間を体感した少年は、その生涯をノイズの再生についやした。

8月 9日 11時 02分時

長崎 ニュークリア

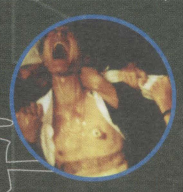
八九一一零二

8月9日11時02分、長崎に原爆投下。
爆音(ノイズ)

彼の耳が聞こえなかったら……

彼の耳が聞こえなかったら……

「独創性に満ちた発想と語り口。「NN-八九一一零二」には、大きな開花を期待させる種子が詰まっている。柴田剛、かなりいい。」
山本政志監督(『ロビンソンの庭』『JUNK FOOD』)



柴田 剛 監督作品 制作 DMT

1999年／16ミリ／カラー／75分

Staff／石塚洋史（撮影監督） 中西のえる（音楽・音響） 森田哲徳 市川恵太 斎藤洋平（脚本）キッズカンパニー（特殊効果）

長崎、ニュークリア(核)、八月九日十一時二分。略称『NN』とも呼ばれるこの作品は、大戦末期の長崎を舞台に、幼年期に「音(ノイズ)」としての原爆体験をしてしまった主人公の零一がその後、その「音(ノイズ)」の再生の為に費やすことになる60年の生涯を一人称で描いている。影絵芝居やそれにまつわる夢などナイーブな視点はアナログでノスタルジックな空気感を再現するためにレトロな美術や装置によって表現され、主人公の残酷なまでに自虐的な行為の暴走が繰り返される。この映画には他者はほとんど存在することはない。すべては零一ひとりのアヴァンギャルド風でレトロ・フューチャーな妄想でもあるかのようだ。
「爆音」に魅入られた主人公の存在そのものがブラック・ユーモアだともいえるだろう。

シネトライブ

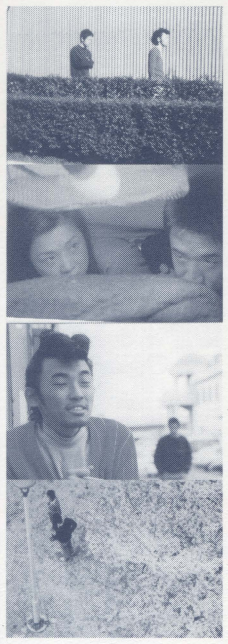
シネトライブ

6月7日(月)～20日(日)
連続レイトショー公開
※6月7日と6月14日は公開記念イベント

どんてん生活

1999年/16mm/カラー/スタンダード/90min　山下敦弘 監督作品

『どんてん生活』　―曇天、くもり空。
先の見えないぼんやりとした生活を送る二人の若者と、その周りを流れ漂う人々や出来事を淡々と描いた日常劇。何となく社会に出るタイミングを逃し、何となくそれにも気付かないで、都合のいい夢ばかり見ている二人。向上心、のようなものはあることはあるが、具体的な人生の目標はない。―それでも何となく生きていていられる―　現代の日本のかたちをシンプルに切り取った作品。



無職で、将来の事など何も考えようとしない青年、町田努の唯一の楽しみはパチンコだ。
その日の朝も、
彼は真冬の冷たい風に吹かれながらウォークマンを聴き、
開店前の時間をボーッとやり過ごしていた。
と、そこへもう一人、朝イチに並びに来る男がいた。
努はその男の風貌を見て唖然とする。頭はガチガチに固めた特大リーゼント、
真っ赤なカーディガンに豹柄のサンダル。
しかも男は平然としながら努の隣に立ち止まる。
だだっ広いパチンコ屋の駐車場に立つ努と知らない男。
気まずい雰囲気をウォークマンに意識を集中させてじっと耐えようとする努。
そんな彼の気持ちなどお構いなしに、
男は買ってきた缶コーヒーを差し出して話しかけて来る。

「……学生さん?」

「いえ……違います……。」

こうして二人の出合いは始まった。

男の名前は南紀世彦。裏ビデオのダビングで生計を立てている。
紀世彦の不思議な存在感に驚きながらも、
努は誘われるままにその仕事を手伝い始める。
パチンコという共通の趣味を持つ彼等が気を許し合うのにそれほどの時間はかからなかった。
やがて、紀世彦の先輩であり仕事仲間でもある田所という中年男や、その恋人である裏ビデオ女優・愛子と出会うと、
努の周りにそれまでとは違う一風変わった生活が広がっていくのだった。

山本浩司と宇田鉄
平がみつめ合い、ことばもなくほ
ほえんでしまうだけで、うれしくなってしまう。
「コミュニケーション不全のたそがれ」というようなフレーズが、私の中で生まれた。だから、新しいコミュニケーションに対する期待が、この山下敦弘という若い作家の中には、あるんだと思った。　「東京夜曲」「大阪物語」　監督／市川　準

その映画だけが持つ映画的瞬間。それは私の記憶に一生残ります。おもしろいもの(街と人々)を観せていただいてありがとう。　「Beautiful sunday」監督/中島哲也

ややもすると小汚い、ありがちな猥雑さに陥りそうな題材を、かなり上品なくらい丁寧な映像でつづっていく感覚が、山下監督の持ち味なのだろう。端正に画面を積み重ね、独特なユーモアを紡ぎ出すあたり、彼の演出の力量を感じた。
それにしても「紀世彦」って登場人物、役者さんの魅力も含めて、すごい大好きです。やはり彼の「特大リーゼント」は最高。　「アベックモシマリ」監督/大谷健太郎

ふと気付くと私は山下君のかもし出した空気による、ノスタルジィの中にいた。ヘンテコリンな掴みどころのない体験をさせてもらった。面白い。　「追悼のざわめき」監督/松井良彦(現・誉士彦)

1998年度ベルリン国際映画祭出品、イタリアタオルミナ映画祭グランプリ作品など昨年各方面で多大なショックと話題を振りまいた『鬼畜大宴会』の制作スタッフ「鬼プロ」の協力下、同助監督であった山下敦弘が中心となり作り上げた長編劇映画。山下はこのデビュー作で180度方向転換しつつ明確に独自のスタイルを築いている。共同脚本・照明・音響・撮影スタッフもすべて『鬼畜…』組。そして音響効果・音楽は『鬼畜大宴会』など数多くの音響効果・音楽を担当しつつ、現在関西を中心にクラブ・シーンで話題の大人数ユニット「赤犬」のリーダー松本章が担当。

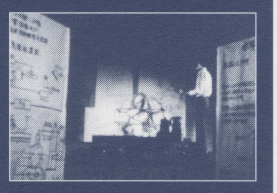
CAST
山本浩司　宇田鉄平　康季丹　前田博通　今枝真紀　柴田剛　神田新　加茂浩志　鳴海なお　井上淳　元木隆史　江戸川渚　三十川十三　山下敦弘　ダルビッシュ賢太(子役)　西平すみれ(赤ちゃん)
STAFF
【監督】山下敦弘　【脚本】向井康介、山下敦弘　【撮影】近藤龍人　【撮影助手】柳田佑子、藤野ミチル　【照明】向井康介　【音響】前田隼人　【音響効果】松本章　【記録】須田結加利　【音楽】赤犬　【制作】真夜中の子供シアター
【広告デザイン】void Graphics　【特別協力】鬼プロダクション

この映画のタイトル『NN-八九一一零二』はこの長崎での原爆投下の日時を表す。

NN-八九一一零二

1999年/16ミリ/カラー/スタンダード/75分
製作●DMT　監督●柴田剛

その瞬間を体感した少年はその生涯をノイズの再生に ついやした。



「過去十年。『映画』自体への実験と冒険を忘れていた独立プロ作品群の中、久方ぶりにドエライ闇の輝きを放つ映画が現れた。私は柴田君(監督)が何を企み、且つこれから何を狙っていくのか、底知れぬ興味を抱かせられた。だから柴田君には何がなんでもその企みを極めてほしい！　私はこの映画を観ることが出来て本当に、とても嬉しい。倖せだ、ありがとう。」　『追悼のざわめき』松井良彦(現・誉士彦)監督

「無茶な企画かと思いきや、まったく「映画」になっている。純粋すぎた男の一代記というドラマチックなストーリー展開に、一人何役という脇の配役が効いている。イマジネーションの豊かさに驚かされ、それを具現化した凝りに凝った美術の「自主製作だからと妥協しない」姿勢に気迫さえ感じられる。監督のやりたいことがストレートに伝わりロマン溢れるラストシーンには本気で鳥肌がたった。」　『鬼畜大宴会』熊切和嘉監督

スタッフ

製作●DMT　[監督・編集]柴田剛　[撮影監督]石塚洋史　[音響・音楽]中西のえる　[脚本]柴田剛、森田哲徳、市川恵太、斉藤洋平
[美術]下田泰司、合田光宏　[衣装]日原木綿子 [助監督]山田晃年　[製作進行]宮原啓輔、本間綾一朗　[撮影助手] 中尾浩嗣　[照明]小林智之
[影絵]上口友子、加藤智子　[撮影協力]近藤龍人、向井康介、石川幸典、鈴木啓介　[特殊効果]キッズカンパニー
[フィルム提供]高岡茂 [広告デザイン]void Graphics

キャスト

長谷川隆也[青年期の零一]　西田有祐[幼年期の零一]　角谷悠[中学時代の零一]　森健司[壮年期の零一・影絵師]
沖充[母親・妻]　小川トト[父親・所長]　山内圭哉[古田・プルート２３９号]

解説

これは長崎原爆投下の日から始まるある男の一生である。主人公の零一は原爆の爆音に魅了されその後の生涯をその爆音の再現に費やすこととなるのである。映画は1940年生まれの零一の少年時代から西暦2000年8月9日、60才になった零一の最後の狂気の実験までをフラッシュバックを多用しながら複雑な構成で描く。
監督の柴田剛は中学時代に8mmを撮り始め、高校入学後は自主映画撮影の傍ら、ノイズミュージック制作にも情熱を傾ける。映画ではニュー・ジャーマン・シネマのヴェルナー・ヘルツォークの『カスパー・ハウザーの謎』やアレクサンドル・ボドロフスキーの『エル・トポ』などに大きな影響を受けた。映像とともにノイズ・ミュージックへの傾倒からこれまで幾つかの映像イヴェントに参加、映画では熊切和嘉の『鬼畜大宴会』とともに高岡茂の『ベイビー・クリシュナ』などに参加してきた。
この作品では「記録と再生」「光と影」をテーマにし、かつて制作された原爆についての映画とは異なった視点で「原爆」に迫っている。

1997年8月9日、長崎原爆資料館を訪れた時のことである。館内を見終わった後、出口付近に置かれていた記帳に目を止めた。「あなたは原爆についてどう思いますか?」との問いに対して、「ぼくだったら、たえれたのに」と、ある小学生が答えていた。
これは、映画を作るにあたり私に残った言葉である。本編の主人公零一もまた、生涯、この小学生のように純粋無垢な男であった。零一はこの戦後55年をどう生きたか?
映画を通じ、零一の半生を追体験してもらえれば幸いである。　(監督談)

映像スタイル

この作品には幾つかの複雑な手法が使われている。
オープニング・シーンでは昭和初期のダブル8のフィルムを入手し、それをシングル8の映写機で映写、デジタルカメラで再撮影。そのデジタル映像をマッキントッシュに取り込み、再構築した上で再撮影し使用するなど複雑な過程をへた映像から「影絵」などアナログな方法まで多様に作品に組み込み、絵物語的に主人公に起こる事象を一人称で描いている。そして物語の時制は複雑に交錯し、観客は1940年代から2000年の8月までの60年間を何度もフラッシュ・バックし、物語はパズル化されてゆくのである。

前売シングル
￥1000(当日￥1200)
前売ダブル
￥1800
前売り券は2作品共通
ライブ付チケット当日のみ
￥2000均一

6月8日(火)～13日(日)
19:00
『NN-八九一一零二』
20:30
『どんてん生活』

6月15日(火)～6月20日(日)
19:00
『どんてん生活』
20:45
『NN-八九一一零二』

運営スタッフ募集

お問い合わせ　パイクス
090-3866-0006

お問い合わせ Pike's 06-6312-8231

第七芸術劇場は休館後も、映画演劇などを目指す若い人の為の貸しホールとして開放します。